



第1分科会

第6分散会

I はじめに

分散会の基調では、地元大会テーマである『事実と実践・創造』～であう つながる「ひと なかま まち」～にあるように、新たなदैあいによってつながりができる、つながることが土台となり、自分が変わる、なかまが変わる、まちが変わる、そんなきっかけとなるようにそれぞれの実践報告から学び、子どもたちや各地域の現実と照らし、重ねながら、人権文化を確かにする分散会にしていくことを確認した。

そして、各地域で取り組まれた実践を交流し合う中で、これまでの実践されてこられた取組の意義の再確認や新たな発見、あるいは改善点を見出し、明日からの活力としていただけるような分散会になるよう事実と実践をもとにした発言や交流をお願いし、討議課題を確認した後、報告・討論を開始した。

II 報告及び質疑討論の概要

ー報告1ー⑦

未来の自分をいっしょに探そう

～手紙でつながるゆうととの1年間～
(大阪市人教)

ー主な質疑と意見ー

大阪 元担任からゆうとに対する学校のかかわりや学年・クラスの状況の説明、また、報告者の先生がどのようにゆうとや家庭とつながっていったのかという補足説明。

大分 担任とゆうとのかかわりは発表の中からみえてきたが、周りの生徒とのかかわりはどうだったのか。

把握しているかは分からないが、小学校の時の様子や、不登校だった中学1・2年生の時ほどのような感じだったのか、卒業式にはクラスの列に入れたということだが、周囲とのかかわりについて知りたい。

報告者 足が痛いから休むようになったということだったが、詳しく聞いてみると、ある一人の生徒

とのかかわりがしんどくなってから登校しづらくなった。

週一の登校にあわせて給食を用意する中で、周囲の生徒に「誰の給食？」と聞かれることもあったが、隠すことなく説明したり、ゆうとの机の上に他の生徒が物を置いたりしないようにすることは必ず行った。

本人が周囲の生徒との関係をあまり求めていなかったこともあったが、今となってはもう少し周囲の生徒との関係をつくってもよかったのではないかと感じている。

協力者 事前の報告者との打ち合わせの中でも、もう少し周囲の生徒とのかかわりをもつことができたかもしれないと反省されていたが、ゆうと本人が望むことをしてきた結果であり、よかったのではないか。また、反省の気持ちをもつことが報告者の成長につながったのではないか。

奈良 子ども(ゆうと)が見せる姿をどう読み解くのかということをおとながどうとらえるか考えさせられる話だった。三者面談に来ないゆうと、(面談で困らせてしまう母の姿を見たくなかったのではないか)連れてこれない母親に対してどのような思いだったのか。

報告者 何とか母親としての役割を果たそうとしている、大変苦勞されている方だと感じていた。一方で、漠然とした質問では回答されにくく、選択肢を設けて答えてもらうように意識していた。なかなか、こちらの思い通りに動いてもらえず苦勞したことは事実。

奈良 ゆうとにとって報告者が母親以外にも自分を支えてくれる人になったのではないか、光のよう存在になったのではないかと思う。

大阪 ゆうとの背景を知って学校全体で関わっていかうとする姿勢が感じられた。ゆうとや母親が感じている生きづらさってなんだろうか、報告者の思いを聞いて、自分も自分の思いを押しつけているだけかもしれないと考えさせられた。

作文を持ってきたゆうとに対してどのような声かけや対応をされたのか、今、ゆうとはどうしているのか、教えてほしい。

報告者 入試用の作文は学校で教師がついて書いたわけではなく、ゆうとが自分の力で自宅で書いてきた。内容も誤字脱字を訂正した程度で、本人の気持ちが表された文章をそのまま使った。将来については高校に行ってから考えたいという本人の本心を大切にしたい。

現在は、連絡を取ってみたが、なかなか登校できておらず、高校とも連携を続けていきたい。

大阪 報告者が本人の気持ちを大切にしたいという思いが良く伝わってきた。

福岡 ゆうとが自分の夢も含めて、高校で考えたいということだったが、どのように考えていたのか、また、現在はどのようにしているのか、を聞いたかったが、先ほどの大阪の方と同じ内容の質問になったので、報告者の回答で納得した。

大阪 報告者と同じ学校に勤務。今年度に入り、報告者はあらたに1年生の担任としてゆうとのかかわりから学んだことを生かして子ども達に接している。半年間様々なことはあったが、報告者の丁寧なかかわりにより、クラスは全員登校できている。時間がない中でも生徒と何時間も話を聞いたというエピソードを紹介。

－報告2－㊸

居心地のよい教室をめざして

～温かい言葉で安心できるなかまづくり～

(奈良県人教)

－主な質疑と意見－

福岡 報告者からあったように A と過ごすことで相手がどうしたらすごしやすくなるか、できるようになるかを周りの子ども達が一生懸命考えただけでなく、報告者自身も自分の考えを押しついたり、マイナスに考えたりしていたことに気が付くことができたということだったが、そのきっかけは何か。

また、周りの子ども達は A に対して優しく接することができるようになったということだったが、A 以外の他の子に対してはどうだったのか。

報告者 ある時、トイレの順番を待っていた時に、A がスリッパが余っているのに前に進まないことに対して、自分は「空いてるスリッパを履くように」と促したが、他の児童が、「先生、A ちゃんは1番のスリッパしかはかへんから待ってあげて、怒らんといてあげて」と言われたことがあった。その時に子ども達の方が A のことを知っているし、今まで自分の考えを押しつけていただけで、A のことをもっと見ていかなければならないと気付いた。

A 以外にも課題がある児童はいて、自分の思いをどンドン言っていけば周りの子ども達は聞いてくれる、「分からんかったら教えるで」という雰囲気できていった。A がきっかけでみんなそんな風に思っている。

福岡 2年前1年生だった A、今年、3年生になった A はどんな様子なのか。

担任も代わっていると思うが、職員間の共通理解や引継ぎはどうなっているのか。

報告者 現担任が来ているので直接伝えてほしい。

奈良 クラスの子達が A の居場所をつくってくれているように感じる。クラスの中では、A だけでなく、すべての子に輝ける場所があるということを大切にしている。A は図工が得意でみんなが筆で絵を描く中、A は指で描いたり、ある日は、教室の一定の場所にずっといるので、どうしたのかなと考えていると、周りの子ども達が「寒いから日差しの強いところにいるんやんね」と周囲からの理解があるエピソードを紹介。教員の思いを子ども達に伝えたいので、子ども達が何を考えているかを把握することが個人的には大切だと感じている。

報告者 職員の終礼ではいつも A の報告が上がり、校内委員会等でも密に連携をとって A の様子を確認している。学年が代わるときも、A へのかかわり方としては周囲の子達に任せている。

福岡 自分も子どもの発言に対して、すぐにダメと言ってしまいがちなので、そうならないように意識した。

A ちゃんハウスをつくったことによって周りの子ども達はどのようにかかわったか、報告者は周りの子ども達にどのような説明をしたのか。

報告者 A ちゃんがにげないようするためというような意見が子ども達から出た時、あまりよくないとは思ったが、最初から否定せずに子ども達がどのように考えているかを聞くようにした。

すると、子ども達が自分たちでルールを作り始めた。例えば、授業中はダメとか、1人ずつ入っていたら時間がかかるから2人ずつにしようとか、入ってほしくないときもあるから〇×の看板をつくらうとか。私自身が分からない時は子ども達に聞くように心がけた。A だけがうらやましいという意見が出ることも覚悟していたが、子ども達と考えていく姿勢でいることで、そのような意見は出なかった。

協力者 会場の方の実践やご意見がある方は発表してほしい。

奈良 取り組みとしては難しいことをしているわけではないが、お互いのことを思いやって生活しているところがステキだと感じた。日常生活を大切にする、子どもとのかかわりを大切にする、子どもにとってのモデルになるという素晴らしい取り組みだと感じた。

福岡 子ども達のプラスの面を見ていく、お互いを知ろうとすることが大切だと感じた。本校は義務教育学校で1～9年生までがいるため、低学年に対して高学年が良いところを書いたカードを貼っていく取り組みなどを行っている。差別発言というの

は“知らない”というところが始まりになっていることが多い。お互いを知ろうとする思いが大切。

福岡 A が特別支援学級に在籍するという点について、周りの児童にどのように伝えているか教えてほしい。

報告者 特別支援学級で何をしているかということ子ども達にしっかりと伝わるようにしている。例えば、支援学級で行ったことをクイズにして児童に出題してみたり、支援学級での頑張りを伝えてみたり、みんな自分が頑張る場所があるということが当たり前のように働きかけている。

協力者 報告の中にあっという間にプロジェクトについてもう少し詳しく教えてほしい。

報告者 学年には様々な事情のある子が在籍していた。コロナで大きな不安を抱えている子や、父親を亡くした子もいた。そんな子たちが1日の終わりに心がほっとするような時間をつくってあげたくて始めた取り組みだった。カードに人の良いところを書いて紙に張り付けたりしてみた。友達や人の良いところに目を向けてほしくて、始めたことで、決して無理やり書いたり、書かれない子が出ないように全員当たりのくじをつくるなどの工夫をした。また、子ども達のモデルになるように教師がさりげなく始め、教員も良いと思ったことをやっていくことを心がけた。

－報告3－⑤

一人ひとりの思いが大切にされる
学級をめざして (大分県人教)

－主な質疑と意見－

奈良 最初はイライラして暴言を吐いたりしていたAが、1年たつ頃には相手を責めず、「まあいっか」と言えるようになるためにどんなことを心がけたか。

本校ではクラスみんなで休み時間に同じ遊びをする“みんな遊び”という取り組みをしているが、やりたい子とやりたくない子がいたりするのが現状で、横のつながりは大切にしてあげたいのだが、何かしている取り組みはあるか。

報告者 休み時間にクラス全員で遊ぶみんな遊びをしている学校は多いが、子ども達が自分からやりたいと言ってきたらやってみようとしている。

また、意欲に個人差があるので、全員にやりたい遊びを書かせて、やりたくない時もあるかもしれないけれど、いつかは自分が好きな遊びが実施されるということで、その課題については解消できるのではないかと。

奈良 子ども達からやりたいと言うまで待つ、という姿勢が新鮮で、今まで遊び係など、教員側から仕掛けていた自分にとっては、そうではないやり方があることを知って勉強になった。

奈良 Aが“分からなさを出していいんだ”という気持ちを持つことができたことは、1本目の報告での進路選択や、2本目の報告でのAちゃんハウスの取り組みなどと重なるところがあり、「分からなさ」と付き合うことについて3本のレポートから学ぶことができた。

クラスの中でAのことが苦手な子がいて、その子をあえて同じ班にしたということだったが、何かトラブルがあったから苦手になったのか、別の理由があったのか、

また、あえて苦手な子を同じ班にするというのは勇気のいることだと思うのだが、どのようにかかわっていたのか知りたい。

奈良 追加の質問で、取り組みとはターゲットをしぼって行うことが大切だと思っているので、報告者の取り組みはおもしろいと思っている。

A以外にも関係の悪い子たちはいると思うが、その子たちにはどのような仕掛けをしたのか、そのあとクラスはどうなったのか教えてほしい。

報告者 班決めは私が行っている。Aが苦手な子というのは、Aとあまり関わりたくないと思っている無関心な子たち、関わらなければ何も困らないと思っている子たちだったので、その子が行動を起こせるようにと思って同じ班にして、その中で自分たちがやりたい遊びを考えた結果、割りばし鉄砲を行った。

他の子ども達については、まだ3年生なんで、いろんな子のことをたくさん知ってほしいと思って、苦手な子ともかかわることができるような班編成にした。楽しい・得意なことをしているので、Aに対してまわりも「すごいなあ」という声が出るようになり、一緒にいてもいいかなと思えるようになっていった。4年生になった今も、とことん付き合えば見方が変わる、ということ学んだ周りの子に支えられて、Aは元気で頑張っていると報告を受けている。まだまだ課題はあるが、Aの新しい一面が見られたと思っている。

大分 今の学校でAよりも長い時間暴れたり暴言を吐いたりする子に出会った。この子は自分が周りから嫌われているし、先生たちからも悪く思われていると思い込んでいて、教室に入れなくなってしまう。親も「うちの子も悪いんですけどつらいです」と訴えており、発表に共感できた。

職場で研修をした時に若い先生から「子供の偏見って僕たちがつくってきたんですよ。」と言われたことがあり、はっとさせられたことがあった。

A に寄り添っていこうとしている子ども達を大切に育ててきたことや、教科担任制でいろいろな先生が A を含めたクラスの生徒と向き合ってきたと思うが、クラスの中できつい思いをしている生徒に対してどんなことを語っているのか、また教員に対してもどのような働きかけをされていたのか。

報告者 2 本目のレポートの中で、「先生の伝え方が良かった」という意見があったが、その繰り返しが大切だと思う。

教科担任制では時間が限られているので、気になることがあっても次の授業に行かなければならないことが多く多い。だから、時間はかかるが、放課後とかに前向きな言葉がけをするようにしていた。他の教員もそのような細かいかわりの中で、A の家庭状況などもつかめるようになってきた。

福岡 A が報告者に質問できるようになった場面は非常に大きな転機。A が質問をしに来てくれるようになったきっかけは何か。

報告者 最初は質問しに来たというよりは、A がブツブツ何か言っているのを聞き取って答えるようにした。A が意図した解答になっていたかどうかは分からないが、答えを言うことはできたのではないかな。だからきっかけについては分からない。

協力者 質問以外にも、自分自身が子ども達とかかわる中で、自分の固定的な見方に気づかされた瞬間などがあれば、そんな場面も含めてご意見をお願いします。

福岡 先ほどの方が言われた「決めつけた見方を私たちがしているのではないか」という話に絡めて話したい。

ここ1か月、校長室(私の元)にやってくる1年生の女の子がいる。私に家のことを話したり、隣の職員室の先生に話を聞いてもらったりも多い。なぜかと言うと、その子は、友達への暴力行為や物隠しがあって教室にいずらなくなった。教師も、「この子はそういう子」という目で見られるようになっていく。しばらくすると、その子が校長室に来なくなったので、担任に理由を聞くと、「もうすぐ、保育園の年長の子が小学校に体験に来る。だから、迎えるための準備をしている」とのことだった。実際に園児が来ると、誰よりも園児を呼び込んで積極的に活動していた。そのことをみんなの前でほめてあげたかと担任に聞くと、ほめていなかった。見方を変えるには普段と違うことをした時に評価をすることがポイントになる。「普段は意地悪な〇〇ちゃんが、今日はこんなに輝いていた」そんな風に伝えていかないと偏った見方、学級経営は変わらない。偏った眼鏡をかけているのは担任、私たち教員であるということ、これまでの意見の中から感じた。

福岡 A は人を助けたりする優しい面を持ちながら、手本がうまくできたのに起こる時があったり、からかわれたと思って泣き出す時もあった。きっと何か体験があったからだと考えるが、捉え方が違うから褒め方を考える必要があると感じた。

ということからもあるように、褒められているのにからかわれていると思ってしまう何か出来事があったのか、また、職員で共通理解するようなことはあったのか。

報告者 A がからかわれたという思い込んだ本当の理由は今もちょっとわからない。ただ、注意ばかりされて、褒められた経験の少なさから、“温かい笑い”を知らないのではないかと、笑い＝からかい、と思っているのではないかと感じた。

勝敗や点数・良いか悪いかにもものすごくこだわりがあったので、保護者がプレッシャーをかけているのではないかと聞いたが、そんなこともなかった。これまでの話から、周囲の偏った見方が A の行動につながっているのではないかとも思ったし、逆にどうしてなのか、会場の皆さんに聞いてみたい。

—報告4—②

『ぼくは、庄七と同じです。』

(佐賀県同教)

—主な質疑と意見—

奈良 報告者の熱い思いが生徒に伝わったと感じている。
自学パス券とは何か教えてほしい。

報告者 ご褒美大作戦をするのにあたり、生徒が何を欲しがっているのかアンケートを取ったところ、自学、要は宿題のことで、教師としては困ったのだが、自学パス券が欲しいということになり、学年全体で取り組むことにした。

奈良 自分も学力保障という観点で、落ち着いて授業を受けることはとても大切であり、そういう場をつくるための入り口として自学パス券を用いることはとても有効だと感じた。では、これ以降の取り組みとしてはどんなことを行ったのか。

報告者 最初はどうかと思ったが、自学パス券をもらっても使わない子もたくさんいた。ためることに喜びを感じていて、券もためるし、宿題もちゃんとやる、券がたまると教員が用意した文房具と交換できるという、ためている子にもメリットがあるという取り組みにしていっていった。みんながパスを連発するわけではなく、ためることを評価することで頑張りを持続させることができるというのは大きな発見だった。生徒指導の先生と打ち合わせをする中で、どんな取り組みも“取り組みの入り口も大

切だが、どんな形で終わるかも非常に大切だ”という話をしていた。学年としては生徒指導が困難な学年だったが、この取り組みがあって授業に50分座って受けられるようになったり、2年生後半からは生徒会活動に前向きに取り組むことにつながった。

福岡 荒れた学年だからこそ人権同和学習が大切だと感じたところがあるが、学年がスタートするにあたってそもそも荒れの要因は何だったのか、また、その荒れを改善するためにどんな力をつけようとしたのか、教員と具体的にどんな話をしたのか教えてほしい。

福岡 今の質問に関連して、学年集団のことを聞きたい。なぜ、菜の花の授業をしようと思ったのか、その背景や理由は何か。

「ぼくは、庄七と同じです。」という感想に対し、「気づけなくてごめんね。」と対応したが、この後に学年でどんな話し合いをしたのか、これを経て新たに授業展開はあったのか、教えてほしい。

報告者 1年生の間に教師と子ども達の信頼関係が崩れていた。廊下を通る教師に子ども達が暴言を浴びせ、教師は疲弊していて学年が崩壊している状態だった。2年生になる時に学年集団を大きく入れ替え、とにかく暴言がひどいので人権同和教育をやっていくことを学年教師で確認した。たまたまコロナ禍で総合的な学習の時間に余裕があったので、がっつり時間をとることができた。若い学年集団でもあり、前向きに協力してくれた。

協力者 1年生で崩壊していたということだったが、小学校からの引継ぎ等はどうだったのか。

報告者 小学校の引継ぎからも高学年の頃から学級崩壊しており、1年生になってもあまりそれが解消されずに過ぎてしまった。

菜の花を授業で実践したことがあったが、難しいと感じていた。以前他の学校で行った時にも、子ども達が自分事と捉えるのが難しいと感じていたが、この学校に来て、ある学年主任の先生から「やっぱりこの学年で菜の花をやるべきだ」と言われたことがきっかけで、学年集団で何度も相談したり、模擬授業をしたりした。そんなたくさんの準備があって「ぼくも庄七と同じです。」という感想を書いた子がいたので、やっぱりやるとよかったと思った。

この授業は決して単発ではなく、事前にも事後にも関連した計画を立てて行った。これだけの準備をして、やっとこの子は自分が庄七と同じですと言えた。それだけ言えない子がいるんだと思ったと同時に、もっともっと子ども達の様子を見ていかないといけないと学年集団で確認した。

福岡 報告者の中学校に校区の小学校はいくつあ

るのか、先ほどの報告の中で人権同和教育は単発ではいけないという話があったが、人権同和教育について共通理解や小中連携などはあったのか聞きたい。

報告者 校区には2つの小学校がある。2つの小学校が同じ部落学習の授業を経験して1つの中学校(本校)に入学してくるようになってきている。また、小学校で部落問題学習をする時は、中学校から必ず誰か教員が参観に行くというシステムができています。小学校で同じ内容を学習して中学校に入学してくることはとてもありがたい。来年度からは義務教育学校として9年間同じ学校での生活になるので、今新たにカリキュラムを作成している。

福岡 それだけのカリキュラムがあるのはすごいと感じた。自分の市でも参考にしたい。

大分 『ぼくは、庄七と同じです。』という発言があった後、保護者や周りの生徒にどのような話をしたのか教えてほしい。

報告者 保護者には授業内容の説明と教師が気づけなかったことに謝罪をした。保護者からはなんとなくは気づいていたけれど、本人は仕返しが怖くて言えなかった。教師が寄り添ってくれたから、今まで言えなかったと言うことができた。気づいてくれてありがとうございます。ということだった。

その後の取り組みとして、学年の中で具体的に何かしたと言えないかもしれないが、学年スタッフが、子ども達をしっかりと見ていかなければならないという意識になった。より、必死に1つ1つのことに取り組むようになった。

福岡 荒れをいうものを教員はどうとらえていたか、小学校の教員はどうか、小中連携はできていたのか、保護者とはどうだったのか、もう少し詳しく聞きたい。

自分のことを話すというのはとても勇気のいることだが、普段からクラスや学年で子ども達が自分の思いを発することができるように取り組んでいることはあるか教えてほしい。

報告者 その学校は3つの小学校から1つの中学校に来るという大規模な学校だったため、あまり細かい小中連携ができていなかった。だからこそ余計に、中学校の教員も「なんでこんなことに」という思いをもってスタートしたこともよくなかった。

具体的に言われてもパツと出てこないが、子ども達の実態に合わせて、必要だと思うことをやっている。何かいい案があれば、会場の皆様から教えてほしい。

－報告5－㊹

希望あふれる春よ来い

～三番叟まわしの伝承に学び、

つなげる取組をめざして～

(徳島県人教)

－主な質疑と意見－

福岡 人をからかったり、相手の気持ちを考えない軽率な言動等の課題があった子ども達が取組を通ってどう変わったか、またこの三番叟まわしをやることに関して被差別部落の親や子ども達にはどんな話をしたのか教えてほしい。

奈良 トラブルを起こしていた生徒が、三番叟まわしを見たり実際に演じたりすることで何か変わったことなどのエピソードがあれば教えてほしい。

大分 自分の周りの学校では、特定の学校で特定の取組をしている学校は自分の知る限りはないので、東みよし町でこのようなことが継続されているようなことが自分の町にもあったらいいなと感じた。

また、最初に役決めをした時にうまく決まらなかった時に、自分だったら「決まったんだからやりなさい」と言ってしまうところを、保存会の人たちの思いを聞いて、自分たちからやりたいと言って取組めたことが素晴らしいと思った。

三番叟まわしを経験した人権委員会以外の子ども達は、演じている子たちを見て何か変化があったのか、様子を教えてほしい。

報告者 まず、本校の生徒の課題に対して人権学習を行うことは、生徒指導の観点からも大切だと思っていた。そこで、この三番叟まわしの取組、自分たちの地元にある素晴らしい文化を通して行動していくことの大切さを感じてほしいという狙いがあった。

生徒の変容としては、学校全体として少しずつ落ち着いて学校生活を送れる生徒が増えてきた。生活アンケートでも、学校生活が楽しいと回答した生徒が増えている。具体的には委員長を務めた課題のある生徒が、自分の役に必死に向き合い、最後はやってよかったという感想を述べるなど、成長が見られた。

委員会に入っておらず演じなかった生徒からも、自分も来年はやってみようかなという意見が出たことは自分の中でも良かったと感じている。

奈良 報告の中から、子ども達から伝えていきたい、つなげていこうという思いを聞いて、その気持ちが伝わってきた。

先人たちが人形を川に流さざるを得なかったような差別があったということで、それに対する怒りや疑問を持つことが、他の人権課題や不合理に気

付いたりするために大切だと思うが、そのあたりについて詳しく教えてほしい。

話は少し変わるが、数ある人権課題の中で、なぜ2年生は年間テーマとしてハンセン病について取り組んでいるのか、教えてほしい。

福岡 各学年での学習テーマについて聞きたい。3年生では三番叟まわしについて取り組むわけだが、1・2年生では部落問題学習には取り組むのか、また小学校では三番叟まわしについて学習することはあるのか、教えてほしい。

報告者 まず、これまでの歴史の中で三番叟まわしに関すること、生徒から怒りや疑問の声はあった。個人的には、“そういう事実があったけれど、前向きに明るい展望を持つことができた”という力をつけていきたかった。

2年生のハンセン病学習については、正しく知るということを大切に、ビデオ教材や、地元の資料館と連携を行っている。

部落問題学習にも各学年で取り組んでいる。1年生は「私の願い」という資料や徳島県の人権資料を活用したり、講演会を実施したりしている。小学校では三番叟まわしの学習をしたことはこれまではないが、今回の取組は知らせることができた。

福岡 地元教材は子ども達にとって良い教材であるものである一方、地域の差別について知ることもなるが、子ども達は差別についてどのように理解しているのか。地域の方の変化などはあったのか。

また、伝統的に行っているものではあるが、なぜ報告者はこの取組をやろうと思ったのか、取り組んだ後、報告者自身にどのような変化があったのか、教えてほしい。

報告者 地域に何か変化があったのかと言われると、あまり掴んでいるものはないかもしれないが、文化祭には一般の人も来られていたので、地元の方から「三番叟をやってるのか」という声をいただくことはあった。

自分自身としては、夏休み前から夏休み中も取り組むなど、時間をかけてつくってきた。コロナ前は録画したものを流していたが、自分としては、生で上演するからこそ見て人に伝わったり、子ども達も多くの人の前で演じることで感じると思うので、子ども達を本番の舞台に立たせたかった。自分自身も子ども達と必死に取り組む中で保存会の方から知らないことを知れたり、子ども達が演じる様子を見ながら学んだことがたくさんあった。

Ⅲ 総括討論

大分 われわれ教員が子どもを決めつけてしまうような言葉にならないようにしたいということを学んだ。

また、子ども達とのかかわりの中で反差別の仲間づくりをしていくこと、これを学年が上がる時にしっかり引き継いでいくことが大切だと思う。

福岡 3人目の報告者の中で、Aが自分の思いを言えた理由は「この先生なら話を聞いてくれる。プラスに拾ってくれる」と思えたからだと思う。

本校の校長が保護者に「子どもの話を聞いていますか」という通信を発行しているが、教員に向けても言えることで、自分も意識をしていきたい。

協力者 子ども達に寄り添うという言葉はよく使うことだが、子ども達に反差別の仲間づくりの話しながら、私たち教職員はどんな仲間づくりができていたのか。昨年度、自分の学校で差別発言があった時に、そのことを問い直した。子ども達に話をする以上、私たち教職員がどうあるべきかは考えていかなければならない。

奈良 最初の3人の報告に共通することは、子ども主体で考えさせ、教師は待つ、その結果、子どもが自分で選択できるということ。しかし、私たち大人は待つことはできているか。本音を聞くには、本音を聞ける関係にならないといけない。仲間づくり、集団づくりは大人も同じ。

福岡 部落問題学習をして家に帰った時、親とどんな話をしているのかを大切にしなければならない。

福岡 今日の報告を聞きながら、自分がかわっている子と思い浮かべた。その子は“自分が強くないといけないというアイデンティティがあった”と言っていて、かかわり方について改めて考えさせられた。

以前、違う講演会で、ある方が、「子ども達が間違っていた情報や偏見を正しい知識に変える。これが啓発だ。」とおっしゃっていて、今日の報告はまさにそのような取組であり、自分もそんな取組をしたい。

大阪 報告を聞きながら、改めて小中連携の大切さを感じた。大変な日常の中で、保護者や子ども達の様子をしっかり伝えていくことが、将来につながっていくのだと確認できた。ある保護者の方から「先生には、子どもたち同士の接着剤になってほしい、それがつながることになる」と言われたことがあって、自分もそんな役割になれるようになりたい。

福岡 部落問題学習については、定期的、継続的にやっていくことが大切だと感じた。以前、小学校高

学年でしっかり行った自負があったが、当時はカリキュラムがしっかりできておらず中学校1年生であまり取り扱っていなかったため、2年生で話しても、子ども達は「あんまり覚えていない」という感想だった。今は、小中ともにカリキュラムができており、系統的な学習ができています。このことから、どの教員も同じ目線で、継続的に部落問題学習に取り組んでいく大切さを学んだ。

福岡 本校では夏休みに、1学期の実践レポートを書くという取り組みをしている。校長も書いている。私はその書き出しはいつも「自分と部落との出会い」というテーマで書いている。部落問題に関しては誰の顔を思い浮かべるか、これが重要。自分は高校の時に会った被差別部落の友達や、担任した子、支部長の方、そんな人たちの顔が浮かぶ。だから、ここで発言しなければならない、そういう気持ちになる。若い先生たちにもこの思いを伝えたい。普段から一緒に家庭訪問に行ったり、夏休みには地域の人に会って先生たちと一緒に行事などに取り組む。

徳島 みよし中学校はかつて学習会があった学校で、地域の子達が各クラスに存在していて、その子達がクラスの中でどのように育っていくかは、学校の大きなテーマである。毎年4月には職員にも必ず研修を行っている。三番叟まわしをやり始めた経緯としては、地域の子達がどうにか、前向きに目を輝かせて取り組めるようなものはないか、キラキラできるような教材や活躍できる場をつくりたかったという思いがある。地域の方たちや教育委員会の協力を受けて20年以上続けてこられた。これができるようになったことが、大きな成果だと感じている。

佐賀 子どもの本音を聞き出すには、大人が本音を言い合えなければならない。佐賀県では、近年、部落差別問題に向き合うために、地区のあるなしにかかわらず、部落問題学習に県をあげて取り組んでいる。支援加配の先生が若手にそういった内容を伝えて、次の世代にスライドしていけるように熱心に取り組んでいる。

佐賀 今の学校では以前勤務した市との人権同和教育への温度差を感じている。報告から、地区のある学校も地区のない学校にもルーツがある子がいると思って教育している。荒れた学校で、いじめられたことを話すにはものすごい勇気がいることで、ものすごく大きな前進だと思う。報告者が最後に持病について話をしようと思ったのは、それだけ子ども達の心が育ったから、子ども達が成長したから話そうという気持ちになったのだと思う。

今は近隣の学校で共通した取り組みができるように、数時間のカリキュラムを組んでいる。

奈良 4人目の報告者の中で、自分のつらさを打ち

明けた生徒の話だったが、この事例以降、こうしたことを防ぐために、学校として対策など何か取り組んだことがあったら教えてほしい。

報告者(佐賀) この事例以降、職員集団の中では、言いたくないことを言えていない子はたくさんいると思って、もっと子ども達をしっかりと見ていかなければならないと思い、会話を増やしたり、思いを強くしたことはあった。さらに、次の学年ではもっと学年としての力を付けられるように、と思っていたが、持病で異動することになったので、本当に心残りだった。ただ、学年の先生とは連絡を取り続けていたので、学年の様子を聞いていると、「何の問題もなく頑張ってるよ」という報告を聞き、これが自分の次の頑張るエネルギーになっている。自分のやりがい・喜びは子ども達が変わっていく姿であり、このエネルギーをどうやって他の教員に広めていけるかというのが今の自分の課題である。また、支部長さんはじめ、地域の方々が分からないことをいつでも丁寧に教えてくれたことが、つらい時も頑張れた大きな理由だ。

東京 本校は53年間人権教育推進校でありながら、区内10校に人権同和教育がなかなか広がらないのが現状。東京都では17の人権課題というものがあり、学年ごとにテーマを決めて取り組んでいる。2日間大会に参加して、時候の学習の浅さを感じたので、人権感覚を研ぎ澄ましていきたい。

佐賀 まだ教員歴は浅いが、自分は人権同和教育の視点を持って子ども達にかかわることで、救われたと思っている。見方や考え方を変えることで、今まで自分が向き合うことができなかった家族や自分の苦しみと向き合うことができた。自分が教えるものというよりは、子ども達と一緒に学ぶ中で、自分との出会い直しができたと思っている。2日間でたくさんの勇気をもらい感謝している。

徳島 報告を聞きながら、自校の特色ある地域を学習に生かしていないと反省した。教員の入れ替わりも多くありながら、管理職として教員の力をうまく引き出しながら学校改革を進めていかなければならないと感じた。報告や会場の意見を聞きながらそんな気持ちを持つことができたので、みなさんに感謝したい。

福岡 中堅教諭として2日間大会に参加する中で、いろいろな人の顔が浮かんできた。異動した今の学校では人権同和教育のカリキュラムがないので、つくっていきいたいと思った。

支援学級に対して交流学級という言い方をしますが、この呼び方に寂しさを感じている。この分科会が始まる時に「言葉を大切にしましょう」という呼びかけがあったが、交流学級に代わるなにかいい呼び方はないのかといつも思っていて、2日間の

分科会の中でそんな温かい言葉がどんどん増えていけばいいあと感じる事ができて、初めての参加だったが、心が晴れ晴れしている。明日から頑張りたい。

報告者(大阪) 自分の教育へのモチベーションとしては、生徒がいつか人生を振り返った時に「あの時の〇〇先生のこんな声かけがあったから」とか「こんな取り組みがあったから」と思ってもらいたい。それが、自分が頑張る理由になっている。自分の声かけやかかわりで一人でも多くの子の人生の糧になればと思っている。

報告者(奈良) 初めての参加で不安だったけれど、会場の温かい雰囲気のおかげで本当に発表してよかった。人権教育担当教員として、知らなくて人を傷つけるのではなく、知っていくことを大切に取り組んでいる。子ども達が本音を語れるようにかかわっていきいたい。今のサポートルームには様々なしんどさを持った子が来ているが、そういった子たちを丸ごと受け止めて、自分を出せるように学校として頑張っていきたい。

報告者(大分) みなさんの発表や意見を聞いて、知ることから本当につながるということを実感した。分からなさや付き合う、ということや、褒められることがいいことばかりじゃない、ということなど、今まで自分が感じてこなかったことを学ぶことができた。本音で話せるためには聞き手を育てるという話があったが、自分自身が良い聞き手になれるように心がけていきたい。また、基本に立ち返って子ども達と頑張っていきたい。

報告者(佐賀) 報告の中でも少し触れたが、来年度から9年間の義務教育学校としてのカリキュラムをしっかりとつくっていきいたい。自分自身、以前の大会の雰囲気やたくさんのエネルギーをもらったことを思い出して、この大会で発表することで自分自身を見直したり、新しい発見を得たいなど思っていた。そんな思いでレポートを書いている中でもいろいろな人のつながりを再確認できた。もっともっと多くの人に伝えられたらいいなと思った。

報告者(徳島) 2日間で会場からものすごいエネルギーを感じた。一人ではできないことも、どのように周囲の人とつながるかで、大きな成果につながれると思った。発表のサブタイトルの“つなげる”という言葉にはこだわった。つながるではなく、子ども達と同和教育をどうつなげるか、地域の方や保護者、生徒同士をどうつなげるかを大切にしたい。個人的には、差別の現状はあるかもしれないが、明るい展望を持って今後もやっていきたい。この経験をいかしていきたい。

IV まとめ 報告・討論・交流の中で、「差別の現状

から深く学ぶ」ことを基軸とした人権学習の大切が語られた。そして、人権学習を行うにあたっての教職員の意識や願いを確かなものにし、共有化していくことの必要性が議論された。

私たちには部落問題の解決に向けて、正しい知識と理解、実践力を身につけるために、自分自身の差別とのかかわりを問い直し、明確にすることが求められる。自分に差別の意識があるとしたら、どこでその意識を身につけたか、被差別の状況にあれば、なぜその状況が生まれたのかということ問い直すことが必要である。教職員自らの学びの中で、ここだけは「ゆずれない」「伝えたい」というものができた時、その思い・願いを持って子ども達とともにつくっていく人権学習ができた時こそ、子ども達の心に届くものになるのではないか。

議論の中で、まず自分が差別するような見方をしていないか、間違った見方をしているのは自分ではないか、今一度考え直す機会になった。

2日間でたくさんのお会いや多くの学びがあった。人権にかかわる価値観は多様であるが、この研究大会のようにみんなでそれをもち寄ってよりよいものにしていくことや認めあったりすることで、人権教育の広がりや深まりができると確信し、願っている。素晴らしい分散会討論を創り上げてくださったすべてのみなさんに感謝して、まとめとしたい。